新潟県央工業高校創立110周年

27日記念式典、記念講演会

明治44年開校、令和3年110周年

新型コロナの影響で2年遅れの記念事業

感染症対策のため出席は500人に制限

明治四十四年に南蒲原郡立三条商工学校として開校した三条市の新潟県立新潟県央工業高校（松原直樹校長・生徒三百八十二人）は、二十七日午後一時から同校講堂で創立百十周年記念式典を行い、続く記念講演会では、新潟プロレスラー「スーパー・ササダンゴ・マシン」としてリングやローカル番組で活躍する坂井精機㈱社長の坂井良宏さんが「ものづくり、体づくり、コミュニケーションの大切さ」で講演する。

創立年の明治四十四年は一九一一年のため、本来の百十周年は令和三年（二〇二一年）だが、新型コロナウイルス感染症の流行で二年の延期を経て、ことしようやく開催する。

当日は一時から記念式典、二時から記念講演会を行うが、万が一の感染リスクを考え、参加は在校生と教職員、同窓会と後援会の関係者、来賓の合わせて五百人程度に限定する。

式典・講演会終了後、六時半から三条市旭町二、ジオ・ワールド・ビップのグランドホールで、約二百人の出席で記念祝賀会（兼同窓会記念総会）を開く。

金曜に行うのは、続く土、日曜で体調観察ができることと、学校では翌二十八日に「百十周年記念文化祭」を開くため。

記念事業は学校旗、校章旗、校名入り横断幕の作成で、既に完成しており、式典でお披露目する。

野球部甲子園出場時には応援団責任者だった松原直樹校長

郡立三条商工学校として開校

三条工業学校、三条実業高校、三条工業高校を経て

平成16年、新潟県央工業高校に

県立新潟県央工業高校は、県央地域の高等学校のなかでも変遷が著しく、平成十六年に現在の校名になるまでに五つの校名を経ている。

まず、明治四十四年四月の創立時から太平洋戦争中の昭和十九年三月までが「三条商工学校」の時代だが、その間でも明治四十四年から大正十一年三月までは「南蒲原郡立」。大正十一年四月から新潟県に移管されて「新潟県立」に変わった。

また、この間の課程は金工科、染織科、商業科の三科で、一学年各学科一学級だった。

次が昭和十九年四月から終戦後の二十三年三月までの戦時措置による県立「三条工業学校」時代。

さらに戦後の学制改革により、二十三年四月から県立「三条実業高校」となり、機械科と商業科を設置。いわゆる「実校時代」が三十八年三月まで十四年間続いた。

この後、三十八年四月には商工分離の考えから三条実業高校から工業系が分離して県立「三条工業高校」が開校。このとき、旧三条実業高校の学籍簿は、三条工業高校が引き継いだ。

「三条工業高校」時代は平成十六年三月まで四十一年間続き、燕工業高校との統合で、県立「新潟県央工業高校」として新たなスタートを切り、今年度で十九年を経過。

また、合併した燕工業高校は昭和三十七年四月、三条実業高校の定時制燕分校を吸収し、県立の新設高等学校として開校。平成十六年の統合以降、十八年三月に最後の卒業生を送り出して閉校。学籍簿は県央工業高校が引き継いだ。

また、同校出身の著名人では、三条実業高校時代の昭和二十八年四月、機械科に、後のプロ野球選手でプロレスラーの「ジャイアント馬場」こと馬場正平さんが入学している。

馬場さんは卒業前の三十年一月にプロ野球の読売巨人軍に投手として入団。後に腕のけがで野球を断念すると、力道山氏の元でプロレスラーとなり、日本と米国のマットで活躍後、自ら全日本プロレスを旗揚げ。レスラーだけでなく、偉大なプロモーターとしても世界に知られた。

平成十一年一月、肝不全のため惜しまれつつ六十一歳で亡くなったが、二十八年十月、三条市で六人目となる「名誉市民」を贈られた。

野球部甲子園出場の記念碑「県央魂」

二年遅れで百十周年を祝う新潟県央工業高校（校舎）

校舎壁面に掲示した「創立百十周年」の文字と全国大会、北信越大会の出場部活名

記念事業で新調した校旗、校章旗、校名横断幕

松原直樹校長（ことし4月赴任）

教員として7・13水害、甲子園出場を経験

創立記念事業が二年延期されて実施される今年度の四月に赴任したのが現在の松原直樹校長。松原校長は平成二十年に野球部が初の甲子園出場を果たしたときに教員として同校に勤務し、応援団担当の責任者としてスタンドから選手たちを後押しした経験を持つ。

松原校長は工業の電気系の教員で、十六年から七年間、同校に勤務。「十六年四月に赴任し、三か月後の七月十三日に、あの『7・13水害』が発生して学校が被災した。正門の校名板のある高さ一・三㍍ほどの石柱の上に、流れてきた冷蔵庫が横倒しになってきれいに乗っかっていた光景は鮮明に覚えている」と言う。

野球部が甲子園に出場したころの学校の様子では、「当時、学校が爆発するかのような元気と勢いがあった。いまは、当時より生徒全体がおとなしい」と言う。

それでも今年度だけで、レスリング部（男子71㌔級）と弓道部（男子個人）がインターハイに出場。ウエートリフティング部（男子55㌔級と81㌔級）、陸上競技部（男子走り高跳びと女子ハンマー投げ）、弓道部（男子個人）、レスリング部（男子71㌔級）、卓球部（学校対抗戦と男子ダブルス）、水泳部（四百㍍個人メドレー・背泳ぎ・二百㍍個人メドレー・百㍍背泳ぎ・四百㍍フリーリレー・八百㍍フリーリレー・四百㍍メドレーリレー）が北信越大会。ウエートリフティング（男子55㌔級）は国体に出場した。

さらに、全国選抜高校生溶接技術競技大会では機械加工科三年生の竹越仁夢（じん）さん（17）が「被覆アーク溶接部門」で優勝。機械工作部は高校生ものづくりコンテスト全国大会の溶接部門に出場。ロボット競技部も全国高等学校ロボット競技大会に出場するなど、文武ともに生徒たちの活躍が光った一年となった。

松原校長は「竹越君の『溶接日本一』獲得は驚いたし、まさに快挙。さらに、近年は優秀な指導者がいることもあり、陸上競技部の成長が目覚ましい。高校生という三年間で、子どもたちはおとなへと急速に成長する。長く教員をしていても、その見違えるほどの変化に驚かされる。実業系高校は特に感じるところが多い」と言う。

今後の「新潟県央工業高校像」では、「県央唯一の工業高校。県央地域は燕三条地区を中心に、製造業など産業の集積地であり、これからも地域産業の発展に貢献できる人材を育成輩出することが求められ、期待にこたえていかないといけない」とした。

現在、同校は「工業科」（定員百六十人）の一括募集で、生徒は二年次で機械技術、メカトロ技術、生産プログラミング、建築、都市防災の五つのコースを選択。三年次に機械技術コースは機械加工科となり、メカトロ技術コースは電子機械科、生産プログラミングコースは情報電子科、建築コースと都市防災コースは一つになって建築工学科の五科編成になる。

「工業科の一括募集制度で、当校は県内で最初期の導入校。一括募集で入学し、基礎を学んだところで興味関心に応じてコースを選択できる。これにより女子生徒も学びやすくなっていると思う。甲子園出場当時、女子生徒は六人だったが、いまは二十人。それでも全校生徒の一〇%にはまだ届いていないが、製品開発には付加価値が必要で、製品を生み出す人たちのセンスは、その付加価値となり得る。そこに男女の差はない。当校には、その部分を磨いて伸ばす指導も求められると感じている」と話す。

平成十六年の「7・13水害」で冷蔵庫が乗っていた正門の石柱（右側）

レスリング、弓道、ウエートリフティング、陸上競技などの部活動が活躍

ことしは「溶接日本一」獲得